

## 特別審査員講評

アナウンス部門：加藤 直裕様 (FM ヨコハマ)

日頃の皆さんの練習の成果が見事に発揮され、今年は非常にレベルが高かったと思います。惜しい点は、細かいところのミス、苦手な部分を克服できずに今日を迎えてしまった生徒が一部いらっしゃるように見受けられました。乗り越えるには、より一層の練習しかないと思います。工夫を重ねて、より一層精進されるよう願っています。

あともう一つ、どうしても、きちんと読むことに集中してしまい、人に伝えるということがおろそかになっていないでしょうか。自分の伝えたいことが1分30秒の原稿・写真に表現できているか？そして、イントネーションやポーズ、アクセント、テンポやリズムが心地よく届けることができているか？家族や友人、またその友人の友人など、1回聴いてもらっただけで伝えたいことが届いているか、伝えるということにも意識を配ってほしいと思います。

アナウンス部門：菊地 秀之様 (日本工学院専門学校 講師)

とてもよく練習していると感じました。全員が発声、発音がしっかりしていて基礎基本ができています。その為、聞きとりやすいアナウンスができていました。

気になったのは、表現の工夫です。内容をどう伝えるか、と考えた工夫ではなく、型にはまったパターン的な表現が多いように感じました。

もう少し自分の伝えたい内容を考えて、言葉や文章のどこで区切って、どのように読めばよいのか工夫してほしいと思います。

アナウンス部門：高橋 景子先生 (横浜市立蒔田中学校)

今年度も審査に参加させていただきありがとうございました。

高校生の大会はやはりレベルが高いと、毎年感嘆しています。声もとても良く、聞いていて安心感がありました。

そのうえで、あなたが聴き手にいちばん伝えたいことは何なのか、それが最もよく伝わるようにするにはどのように読めばよいか、どんな言葉を使えばよいか……。

聴き手の顔を思い浮かべて練習することがさらに伝わるアナウンスへとつながります。

来年度も頑張ってください。

アナウンス部門：熊野 リカ先生（横浜市立今宿中学校）

今年も参加させていただき、ありがとうございます。高校生たちがエントリーするだけでなく、運営の一人として会が進行していくことに、いつも感心しています。

そして今年も中学の大会でも見たお名前を見つけては密かに嬉しく思っています。

会場でもプロの方からお話がありましたが、私も全体的に早いな、と感じました。ものすごく真剣に聞かないと内容、言葉を理解することが難しいと。でも放送って本来”聞く側”がそこまで努力するものなのか、と考えると、やはり放出側がすべき努力があると思うのです。

何かの紹介も、何のためにそれを紹介しているのかと考えて原稿を見直してみると、+αの色付けができるのではないかと思います。

（コンテストだから…ということでは伝わるものが弱くなりますね）

来年も期待しています。

朗読部門：秋元 紀子様（朗読家、演技・朗読講師）

皆さん、お疲れ～！

よく頑張りましたね。今日まで大変だったことでしょう。頭でこうしてあーして、と考えた読みは聞く人には、その技術が伝わるだけになります。またはあらすじのみ。

心が一番大切、伝えたいことを胸に決して忘れないで下さいね。

自分自身で読むこと、自分の中心からずれないこと、そして他人と共有したい！という気持ちをお願いしますね。

またお会いしましょう！

朗読部門：熊谷 ニーナ様（日本工学院専門学校 講師）

みなさん本当にお疲れ様でした！！

名前を言うときにどんな思い（思い）で第一声を発していますか？目が合い、意志を感じた方はやはり表現もステキです。ただ上手に読もう！ではなくこのお話の良さを伝えたい！自分の語りを聞いて欲しい！？何でも良いです。心をしっかり動かしてスタートしてみてください。覚えるくらい読み込んでいた人も、それくらい努力したことが表現の自由さにつながっていたと思います！

もっともっとけいこの時に表現めいっぱいしてみてください。

オーディオピクチャー部門：滝沢 伸幸様（ラジオ日本）

力作ぞろいで素晴らしい作品ばかりでした。

全作品が一定のレベル以上に達していて、採点結果も以前よりかなり狭い範囲に集中していました。その中で差が出たのは、テーマ選びでは「着眼点」、「意外性」、「広がり」などでしょうか。制作技術では、「インタビューの内容や音質」、「写真のクオリティー」、「視聴者を引き付ける演出」などだと思います。

例えばある人物を主人公としてフォーカスする場合は、本人のインタビューだけでなく廻りの人のインタビューを入れるなどして広い視野から主人公の人物像を浮かび上がらせるなど工夫が必要でしょう。「この人はこんな人物です」といった説明ナレーションを入れなくても視聴者が理解できる番組構成が理想だと思います。お店やイベントをテーマに取り上げる場合も同様です。

もう一つ言うとならば、もう少し遊び心（クスッと笑わせたり、ホロリと泣かせたり、奇想天外な展開でびっくりさせたり、ミステリー仕立てでドキドキさせたり等々）があればもっと良くなる作品もあり、今後は色々なパターンに果敢にチャレンジしてほしいと思います。

オーディオピクチャー部門：倉林 由男様（元ラジオ局アナウンサー）

音の世界は面白いです。音と音楽で人の心を掴む。人の心に入っていく。そして視聴者を現場に連れていく。その面白さをぜひ味わってください。

歴代、先輩方がいいものを作ってきた伝統が今神奈川県に根付いてきています。

どうぞ、人に出会うこと、人に取材すること、それを伝えることで人々の心を掴むことを覚えて放送の世界の素晴らしさを表していただきたいと思います。

オーディオピクチャー部門：高橋 晴美先生（横浜市立寺尾中学校）

今年度、初めて高校生の審査をさせていただきました。地域に密着した様々なテーマを楽しく拝見することができました。

初めて知るものも多く、もっと知りたいと思うものが多かったです。高校生の取材力や技術の高さ、表現力に感心させられました。

日頃は中学校で指導をしています。中学生たちに今日の経験を伝えていきたいと思っています。ありがとうございました。

ビデオメッセージ部門：遊馬 秀樹様（テレビ神奈川）

テレビ局代表としてビデオメッセージ部門の審査を担当しましたが、力作が多いことに驚きました。

高校生ですから、本業である勉強の合間に制作したのだと思いますが、皆さんの努力に頭が下がります。取材の交渉や撮影などは、時間と予算の制約がある中で、必死に取り組む姿が目につかび、好感を持ちました。

優秀作品に選ばれた「そば屋のシチウ」は、創業100年の老舗蕎麦屋がなぜビーフチューを定番メニューにしたのか!?という秘密を解き明かしていく展開で、引きつけられました。また、色とりどりの珍しい野菜を生産する「お母さん農家」のレポートでは、台風の翌日に畑を心配して取材に向かう作者の姿勢が立派でした。

「和英辞典誕生の秘話」も、丹念にリサーチし粘り強く取材した跡が窺われ、硬い内容を再現ドラマを駆使することで、柔らかく分かりやすく表現できていました。

ここで<重要なこと>と<上達のコツ>を1つずつ。

良い作品は、見る人に「伝えたいことを一言でいえる」作品です。たとえ5分間の動画であっても、10分15分であっても同じです。私の作品は「このことを訴えたい!」を文字にして、常に意識しながら作品制作を進めてみてください。インタビューや撮影、ナレーションを考えるときなど、いつも「訴えたいことのために、これは必要か?」「どの手法で表現するのが効果的か」を考えて取捨選択していくことが重要です。たとえば、「このお店のスイーツは美味しくて大人気です」とナレーションを入れた方が良いのか、店でケーキを美味しそうに食べる人の姿を映した方が効果的なのか、などといった判断です。

そして「テレビのニュースで特集コーナー」をよく見ることが、上達への早道です。「このグラフはさっきのインタビューを証明しているな」とか「ナレーションを敢えて入れず、涙で語らせているな」など、いろいろ考えながらみてください。そこには様々な工夫や技法があり、発見があると思います。それらをどんどん真似してみてください。

明日を担う映像作家（放送局、制作会社、YouTuberなど、広い意味で）が、この総文から誕生することを願ってやみません。

ビデオメッセージ部門：北川 敬一様（日本工学院専門学校 講師）

<エール！>

まずは、いろいろな制約のなかで、1年生と2年生がなんとか作品を完成させたことに敬意を表します。

私は、毎年、上映後に1本ずつ感想を伝えることに決めています。とても素直に私の拙い話を聞いて、そして答えてくれる高校生たちに感謝しています。ありがとう。

今年はとても気に入った作品（食べ物を取り上げた）に出会ったので、その作品にエールを送ります。その作品はインタビュー対象者のメインの方が、顔の撮影がNGだったので最後まで表情を見ることができませんでした。とても丁寧に作っていて好感が持てる作品だったので「残念だなあ、悔しいなあ」と思いました。

表情を見ることでいろいろなことを想像できると思います。顔がないインタビュー映像は、ラジオと同じかもしれませんね。次回作るときは顔の撮影がOKの方を取材してください。しっかり作っていたから自信をもってください。大丈夫だよ。楽しみにしています。

ビデオメッセージ部門：佐藤 博昭様（日本工学院専門学校 講師）

それぞれの地域の問題をさがして5分にまとめるのはとても難しい作業です。それ由におもしろい。それぞれの困難が見えるからです。

18作品を拝見してもうひと工夫だと思った点は自分たちの発見や驚きをもっと、おもしろくって映像に残してほしいということです。作り手が面白いと思うこと。楽しいと思う体験をすること、それが一番大切なことだと思います。

ビデオメッセージ部門：町田 義広先生（川崎市立大師中学校）

番組を制作するにあたって、何を伝えたいのかを大切にしてください。制作中に”このインタビューは必要？””この映像は必要？”と思った時は何を伝えたいのかに戻ってみてください。答えはあるはずです。

そしてチームワークとコミュニケーションを大切に制作すると良いアイデアが生まれると思います。今後も良い作品を作り続けてください。

情報部門：渡辺 英司様（神奈川工科大学）

発表されたチームの皆さんお疲れさまでした。発表資料は良く調べられており、出展等もきちんと明記されているものが多かったです。また、発表も工夫されているものが多く、楽しく見させていただきました。少し残念なのは、見ている方の質問が少なかったことです。この大会は発表者だけでなく、参加する全ての方でつくる大会です。質問することは、本大会を活性化させ発展させる原動力となります。さらに多くの皆さんの質問や参加を期待しています。

内容では、自己の考えを持ち論理立てて、説明することが少し弱かったように思います。現時点の話題やその説明はよくできていましたが、「問題提起（仮説を立てる）、根拠となるものを示し、解決法を示していく。」という点について更に学んで行ってください。厳しい見方をすると諸問題(課題)に対する解決法(案)が独創性に乏しいものがありました。高校生ならではの解決法(案)を今後期待したいと思います。

情報部門：熊本 丈力先生（神奈川県 元中学校教諭）

本日は初めて情報部門を審査させて頂きました。中学生とは違う、さすが高校生だけあって、プレゼン能力やテーマの着眼点のすばらしさに感動しました。ありがとうございました。今後に向けて、改めて「何を伝えたいのか」もう一度ふりかえってみましょう。テーマを決めてもどう構成していくのか、誰を対象に、そのテーマを何に絞って訴えたいのかを考えてみるとよいです。

そして発表当日はも「どう伝えるのか」プレゼン画面は何が適切なのか、文字の大きさ、色づかいはどうか、話し方としてスピードはどうか、間はどうかなどを是非本番前にお互いにチェックできるとよいと思います。

また機会があれば、すばらしい発表を聞かせてもらうことを楽しみにしています。ありがとうございました。